轟　木　の　神　碑

轟木下　　木村　隆一

明治9年発行の「**新撰陸奥国誌**」や、明治36年の「**糠部五郡小史**」に、「**轟木の神碑**」として次のように記されている。「神碑は、轟木より百石村に至る坂道の上り口＝（中略）＝の**風穴平**という場所にあり、高さ三尺・巾二尺・厚さ一尺・地中幾尺なるを知らず。」この石は「天然石に苔が生え、点々と豆の如き穴があるのみ。字躰更に見へず。」とある。そして、地元の人々は「千曳の神碑」と呼んでいたという。

平安時代初期に大和朝廷が蝦夷地へ進出したが、伝説によると、坂上田村麻呂が陸奥の最奥の石に「日本中央」と彫り込んだという。書かれた書物は「袖 中 抄」という藤原顕昭が著したもので、この本がいしぶみ伝説の初見である。松尾芭蕉も宮城県に奥の細道紀行で入った際、多賀城の碑を伝説のいしぶみと信じて疑わなかった。これに刺激されて出土したのが東北町の**坪（千曳）のいしぶみ**である。古へより、このいしぶみは江戸や京都の文化人の間では注目の的であった。その新たないしぶみ伝説として、この轟木の神碑もあげられているのである。↗

【轟木の神碑】

→轟木の神碑については、菊池魚目（八戸藩七代藩主、南部信房公の御殿医）の遺稿集「五戸八勝詩」にも記されている。その中で、魚目と交友のあった荒木田舎暉は、

「 とどろきの　ちびきの神の　いにしへも　つたえて久し　道のいしぶみ 」と和歌を詠んでいる。その他、同じく八勝詩を詠んだ文人として、頼山陽に師事した堯戒（五戸出身）も轟木の神碑を紹介している。

このように、「轟木の神碑」は名勝として歌にも詠まれ、轟木の鎮守の杜である**「正一位風穴稲荷大明神」**の参道入口右奥に立っている。**風穴稲荷は、轟木の豪農「鈴木與兵衛」家で奉祭**（神仏などをまつる）しており、12月3日の年越祭には、オシトギを三個ずつ供える習しがある。また、春秋の例大祭には村人がご馳走を持ち寄り、「初一稲荷の大黒様」の歌を唄って踊るという、いわゆる「村人のコミュニティーの場」でもあった。参詣者らは、参道を上る際には必ず「轟木の神碑」に掌を合わせたのであった。

古へより村人の誇りとしてきた「轟木の神碑」。

江戸時代の紀行家・菅江真澄が千曳のいしぶみを尋ねてやって来るが、探しあてることができなかったという。また、明治天皇が東北御巡幸の際に、「史実に残る田村麻呂の↗

→名石はどうなっているのか。」とおたずねになったという話も伝えられている。

とにかく、謎が謎を呼ぶロマンあふれる石碑が轟木集落に存在するのである。

【 参 考 資 料 】

•滝尻善英:「轟木神碑の事」

•伊藤勝司（元轟木小校長）
学校だより:「轟木の神碑」

【 轟木 ： 風穴稲荷大明神の鳥居 】

（ この大鳥居は現在修復中。六角形の礎石に「天保7年」の銘あり。 ）

※　ここ、轟木の風穴稲荷大明神には、かつて「五戸月山八幡宮」が鎮座していた。⇒現在は五戸町の根岸へ移転。